

□ オーケストラ

東 条 碩 夫

●国内オーケストラの活躍、意欲的なレパートリー

来日オーケストラのプログラムが、客寄せを求めあまり、相変わらず判で押したように名曲ばかりで構成されることが多かったのとは対照的に、国内オケの企画には意欲的なプログラミングと、高水準の演奏が数多く聴かれた。

その中でも特筆されるべきは、読売日本交響楽団の活動である。カンブルランの指揮で11月に敢行したメシアンの歌劇「アッジの聖フランチェスコ」の演奏会形式全曲日本初演は各方面から絶賛された。指揮者と楽団、事務局などの呼吸と熱意が合致したからこそこの成功といえよう。この演奏会に先立ち、同じメシアンの「彼方の閃光」（1月）、「忘れられた捧げもの」（4月）をも演奏、更に毎月のプログラム冊子でメシアンについての解説を連載するなど、山場に向けての総合的な盛り上げの企画も巧みであった。読響はこの他にもカンブルランの指揮でバルトークの歌劇「青ひげ公の城」（4月）を演奏会形式上演、ロジェストヴェンスキーの指揮でブルックナーの「第5交響曲」をシャルク改訂版で演奏（5月）してファンを話題を集めるなど、その演奏水準の高さとともに、レパートリーの開拓に力を入れた。

その他の国内オーケストラも、意欲的な企画を数多く出した。特に快演だったものを挙げると、まず東京交響楽団は秋山和慶の指揮でメシアンの「忘れられた捧げもの」、矢代秋雄の「ピアノ協奏曲」、シュミットの「サロメの悲劇」を演奏（1月）、沼尻竜典がグバイドゥーリナの「アッジの聖フランチェスコ」による《太陽の賛歌》を日本初演（4月）し、音楽監督ノットも、12月にリゲティの「ハンブルク協奏曲」をプログラムに乗せていた。また東京フィルは、プレトニョフの指揮でグリーンカ、リムスキー＝コルサコフ作品集の「聖女フェヴローニヤの物語」「皇帝サルタン」の組曲など、ふだんあまり演奏される機会のないロシア音楽ばかりを集めたプロを組んだが、ここの音色は絶妙なものがあつた（10月）。東京都交響楽団は、マーティン・プラビンス指揮でバターワース、ティベット、ヴォーン・ウィリアムズの作品を集めた英国プロを組み（5月）、アラン・ギルバート指揮はジョン・アダムズの「シェエラザード.2」（4月）を指揮した。

テーマ性を持つ凝った選曲を行っていたのは上岡敏之が音楽監督を務める新日本フィルで、彼の指揮によりデンマークをテーマにツェムリンスキーの「人魚姫」とニールセンの序曲「ヘリオス」を組み合わせ（10月）、ベックリンの絵画「死の鳥」をテーマにラフマニノフの「死の鳥」とレーガーの「ベックリンによる4つの音詩」とを組み合わせる（11月）など、上岡らしい精妙な企画を打ち出した。また日本フィルでは、ピエタリ・インキネンがワーグナーの「ラインの黄金」を演奏会形式で指揮し、ふだんオペラをあまり手掛けたことのない同楽団の意欲を燃え立たせ（5月）、正指揮者・山田和樹もマーラー交響曲&武満徹ツィクルスを完成している（6月）。NHK交響楽団も、パーヴォ・ヤルヴィの音楽監督就任以降、定期的に20世紀の作品を少し増やしており、2月には彼の指揮でペルトの「シルエット」とトゥールの「プロフェシー」をいずれも日本初演、客演指揮者も11月にはソヒエフがプロコフィエフの「イワン雷帝」

を指揮、下野竜也も1月にマルティヌーの「リディアへの追悼」や「フサ」を取り上げている。

●各都市のオケも意気盛ん

京都市交響楽団は下野竜也指揮でジョン・アダムズの「ハルモニール」を11月に取り上げたが、同楽団の最近の演奏水準の高さは定評があり、びわ湖ホールでの「ラインの黄金」（3月）での快演も絶賛された。日本センチュリー交響楽団も飯森範親指揮でギア・カンチェリの「ステュクス」を日本初演（9月）、また大阪フィルは井上道義の指揮でバーンスタインの大作「ミサ」を舞台上演（7月）、それに先立ち2月にはショスタコヴィチの交響曲「第11番」と「第12番」を一夜のプログラムに組むという精力的な企画も披露した。名古屋フィルも川瀬賢太郎指揮でショスタコヴィチの「十月革命」とプロコフィエフの「アレクサンドル・ネフスキー」を取り上げ（2月）、兵庫芸術文化センター管弦楽団は佐渡裕の指揮で「トゥランガリラ交響曲」を上演（9月）。広島交響楽団も秋山和慶の指揮で近衛秀麿、大栗裕の作品にメシアンを組み合わせる大胆なプロを3月の「ディスカバリー・シリーズ」で披露していた。

●シェフの異動

広島響では、音楽監督・常任指揮者の秋山和慶が3月をもって退任、替わって下野竜也が音楽総監督としての活動を4月のブルックナーの「第8交響曲」で開始し、以降のプログラミングにも彼らしい斬新な個性を出しはじめている。また「紀尾井シンフォニエッタ東京」は4月に「紀尾井ホール室内管弦楽団」と改称、ライナー・ホーネックを首席指揮者として新しいスタートを切った。大阪フィルでは井上道義が3月で首席指揮者を退任、替わってミュージック・アドヴァイザーに就任した尾高忠明が2018年4月より音楽監督に昇格することが決まっている。なお仙台フィルは、2006年から常任指揮者を務めていたバスカル・ヴェロが2018年3月退任するに伴い、飯守泰次郎を後任に迎えることを発表した。札幌交響楽団でも首席指揮者マックス・ボンマーの2018年3月退任に伴い、マティアス・バーメルトを後任とすることを発表している。この他、札幌と親密な関わりがあったチェコの名匠ラドミル・エリシュカは、健康上の理由で日本訪問はもはや無理として、10月に札幌と告別公演を行い、楽員と聴衆から涙の拍手を贈られた。かくも惜しまれつつ日本の指揮台を去った巨匠は稀であろう。

●来日オーケストラの動向から

2017年にも秋以降に来日オーケストラが集中した。ガッティとロイヤル・コンサートヘボウ管は予想以上に相性の良さを示し（11月）、シャイーとルツェルン祝祭管は豪壮華麗な大音響で聴衆を圧倒し（10月）、プロムシュテットとゲヴァントハウス管は滋味あふれる演奏でファンを心打った（11月）。コンビとしてはこれが最後の来日となったラトルとベルリン・フィルは常に変わらぬシャープな演奏を聴かせたが、プログラムに陳銀淑の「弦の踊り」を入れ、海外メジャー・オケの名曲ばかりの日本公演プロに一石を投じたのが注目される（同）。同様にリンドバレイとノルウェー・アークティック・フィルは、オルセンの「アースガルズの騎行」、トルセンの「触れられざるものへの讚美歌」などを映像入りで演奏し気を吐いた（10月）。その他、ネルソンスとボストン響（11月）、サロネンとフィルハーモニア管（5月）も快演を残していった。中でも、バイエルン国立管とともにキリル・ペトレンコが日本デビューを行ったのが特に話題を集めた（9月）。